# 家事(イエゴト)を外に出す、共有する

## シーナと一平……ミシンカフェ

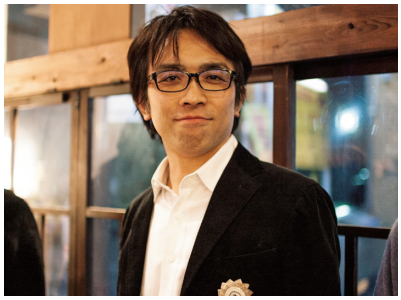
### ミシンで地域とつながる旅館&カフェ

『シーナと一平』は東京都豊島区の西武池袋線椎名町駅から徒歩2分の商店街にある。築40年以上のとんかつ屋をリノベーション、1階をミシンカフェ、2階を外国人向けの旅館として2016年3月にオープンした。内装会社を経営する日神山晃一さんらが「家守会社 株式会社シーナタウン」を設立。改修・運営を行っている。

『シーナと一平』のコンセプトは「ミシンで地域とつながり、ファブリックで世界とつながる」。池袋に近く、古くからの商店街が外国人に人気の椎名町という立地から、町を一つの宿に見立てたホームステイならぬ「タウンステイ」にするという構想が生まれ、現在は「番頭」がカフェと旅館を切り盛りしている。ミシンをシェアするカフェのアイデアは、日神山さんの実家の内装店で、母親がカーテンを手作りするのを見て育ったことから生まれた。自身もカーテンを手作りする日神山さんが、ミシンを入り口にして、手作りの愛着で地域の世代をつなげたい、とミシンを提供して始まった。

### 長崎二丁目家庭科室

ミシンカフェ常連の一人、大阪で介護ベンチャーを立ち上げ住宅型老人ホームを運営した経験を持つ藤岡聡子さんが、世代を問わず地域の人が出会う拠点をつくるべく2016年7月から「しいなまちの茶話会」を月1回開催し、地域に住む70代前後の人の話を子育て・若手世代が聞き、話をする機会をつくった。


日神山晃一さん

番頭“つよぽん”が海外からの宿泊客に1階カフェで対応する

前身のとんかつ屋の風情をそのまま活かした『シーナと一平』の外観

これが前身となり、老年期の地域の人がもっと自然体で社会的な役割を楽しんでほしいと、2017年4月から、月曜日から木曜日に開かれたのが「長崎二丁目家庭科室」だ。これは、高齢者も含めた地域の人が手芸や編み物、料理といった自分の得意とすることを教えたり学んだりできる場所で、日替わりで看護師による健康チェックや親子向けの認知症サポーター養成講座も行われた。2018年2月までの11カ月間でのべ1,000 人以上が利用したそうだ。「家庭科室」自体は、藤岡さんの第3子妊娠や別事業への取り組み開始もあり、2月末で終了となったが、今後もミシンカフェを利用したさまざまな人による活動が続いていく予定だ。

### 女性の力を見えるようにする

ミシンカフェでの活動の主体は女性たちである。シーナタウンでは、1階のミシンカフェを使って何かをしたい女性に、2階の旅館の客や、ミシンを利用したい人、カフェに立ち寄る近所の人々とのコミュニケーションを条件に、低い利用料金で場所を提供している。日神山さんは「女性たちの能力とやる気といった『力』はとても『すごい』のに、なかなか外に見えにくいことがもったいない」という。その「力」とは、一例を挙げるなら、日常生活の中から生まれる、料理や菓子づくり、手芸、裁縫等モノづくりの力である。そうした力を、ワークショップやカフェ、「家庭科室」のように外に見える形で発揮するための拠点になればという。何かやりたい人が何かを始める敷居を下げるだけでなく、『シーナと一平』の知名度を活かして取材等を受けることで活動をもっと広く知ってもらうことができ、場所自体のPRにもなるという意味で、利用者と場所の間によい循環ができる。

さらに、日神山さんは、『シーナと一平』を、女性が望む働き方や人生のタイミングに合わせて活躍できるチャンスを大事にする場所にしたい、と考えている。常に、何か始めてみたい！と思っている人が一歩踏み出せる場所、出産や育児その他でスタイルが変わったとしても、その時その時にふさわしい形で関わり続けて、また戻ってこれるような場所になることが理想的な姿ということである。

たけのうち さちこ●上智大学大学院文学研究科博士前期課程卒業。1982年、㈱シナリオワーク設立。その後同社取締役、個人事務所設立を経て、2003年シナリオワーク代表取締役に就任。女性消費者を中心とする消費者研究、マーケティング戦略立案などのプロジェクトを手がけ、今日に至る。

# ●喫茶ランドリー……カフェの中に“まちの家事室”

## マイパブリックとグランドレベル

東京都墨田区、JR総武線両国駅から徒歩10分のマンションが立ち並ぶ一角。古いビルをリノベーションした建物の1階に、2018年1月、『喫茶ランドリー』がオープンした。レトロと現代がミックスされた雰囲気の喫茶店の中に、外国製の業務用洗濯機と乾燥機が設置され、アイロンやミシンもあるヨーロッパの住宅の家事室のようなスペースがある。

ここをつくり、運営しているのは株式会社グランドレベル。代表の田中元子さんは建築関係のコミュニケーターやライターの傍ら、2015年から街角にパーソナル屋台を持ち出し、コーヒーを振る舞う「マイパブリック（自家製の公共）」という活動を行い、まちにおけるパブリックとプライベートの交わりの場である「グランドレベル（地面に面した1階部分）」の重要性に気づいた。そして、「1階づくりはまちづくり」というコンセプトで、よいグランドレベルをつくるためのコンサルティング会社を立ち上げた。『喫茶ランドリー』は彼らが手掛けるグランドレベルプロデュースの1モデルとして、PRの場も兼ねている。

## 喫茶店に ランドリーをつくった理由

喫茶店にランドリースペースがあるランドリーカフェのモデルは田中さんがデンマークのコペンハーゲンで見たランドロマットカフェ（The Laundromat Cafe）。日本でも最近増えてきたコインランドリーにちょっとしたカフェスタンドを備えたものとは異なり、カフェがメインでランドリーはおまけ程度である。田中さんはこの違いは大きいという。カフェがメインであるということは、そこが単に自宅でできない洗濯をする場所ではなく、ゆったりとコーヒーを飲みながら過ごすサードプレイス的居場所になるということである。一方、ランドリーがあることにより、そこは単なる仕事の合間にコーヒーを飲む場所ではなく、子ども連れのお母さんなども来やすい地域の共同家事スペースにもなる。

田中元子さんと大西正紀さん

『喫茶ランドリー』のカフェスペースとランドリースペース

実際、『喫茶ランドリー』には、若者やサラリーマンが一人でコーヒーを飲みながら仕事をする傍ら、小さいお子さんを連れたお母さんや高齢者が来て、洗濯する間におしゃべりをするなど、さまざまな人々が交わる場となっていることがうかがわれる。そうした人々に対して、店主である田中さんとパートナーの大西さんは気軽に声を掛け、ちょっとしたおしゃべりを交わす。それにより、この場所はカフェでありながら地元の人々の交流の場でもある、現代の素敵な“井戸端”という雰囲気を醸し出している。

「喫茶ランドリー」ではテーブルやスペースを時間貸しもしている。そこでは、事務所スペースのテーブルでパンをこねるワークショップ（オーブンは近所の人の家のものを使い、できたパンがカフェの客に振る舞われた）や、夜の喫茶スペースで近所の住人が親戚を呼んで20人の焼肉パーティが行われた。また、近所の会社が勉強会を開いたり、ミシンを使ったワークショップが行われたりもしている。地域のお母さんの手作り作品を店内の壁に飾るなど、地域の共有スペースとして自由に使われていることがわかる。

## ルーティンワークから 楽しい時間に

田中さんは「場に補助線を引く」と表現するが、人は何もない空間だと何をやっていいかわからず、中身が詰め込まれすぎると消費に回ってしまうのだそうだ。何もない空間に補助線を引くと、人はその場所を自分で動かし始める。カフェという場に家事室ができることで、人々にとって家事をする場所と時間が変わる。いくら便利な家電製品があっても、家でする家事は孤独で、毎日代わり映えのしないルーティンワークだが、『喫茶ランドリー』に行けば、人と会うことで昨日と今日の家事時間が違う時間になるのだ。自分一人で背負うか誰かにやってもらうかの二者択一だった家事が、人と楽しんでスキルを高めることで、自立の一歩にもなる。田中さんはそれを無理に促すことはせず、「放って待ちつつ、何か出てきたら受け止める」という姿勢でアシストしている。

## 家事を共有するとどうなるか

### 家事時間を家からまちに

『シーナと一平』と『喫茶ランドリー』、2つの場所の共通点は、これまで家の中で主婦（主夫）が一人で担ってきた「家事（イエゴト）」を外に出し、街の中で共有できるものにしたことにある。『シーナと一平』では共用できるミシンがあり、それを媒介に手芸や裁縫に関心や必要のある人が集まったり、地元の高齢女性から編み物や刺繍を教わる「家庭科室」が立ち上がったりといった形で、主に布に関わる家事が共有されている。

『喫茶ランドリー』では、業務用ランドリーのある家事室のようなスペースを核に、洗濯やアイロン掛けをしながらコーヒーを飲み、おしゃべりをするという時間を楽しんでいる。ミシンを共有する形でのワークショップが開かれたり、家事スペースの広いテーブルを使ってパン作りが始まったりといった形で、家事の場所と時間が個人個人の家からまちの中に出てきて共有されるということが起こっている。

### 「家事（イエゴト）」の共有で何が変わるのか

「家事（イエゴト）」が家の外に出て、共有されることにより、何が変わったのか。それは田中元子さんの指摘にあるように、家の中での家事がもたらす孤独感と際限のないルーティンワークの徒労感から、主婦（家族）たちを解放したことである。そして、スキル次第では、家事能力がその人のリソースとして、他者から喜ばれる価値になり、場合によっては経済的な力になりさえするという発見と、それによる個人のエンパワーメントである。

『シーナと一平』のWeb サイト。左から2人目が藤岡聡子さん　http://sheenaandippei.com/

考えてみれば、家事というものは、かつては共同の井戸端や水場、作業場に皆が集まり、場所と時間を共有して行われるものであった。家の中で行われるにしても、家族の人数が多く、使用人もいるという状況では、一人で孤独に作業するということはあまりなかったのではないか。集まって作業をする中で、スキルが伝達されたり、作業しながらおしゃべりをしたり歌ったりするといった形で、コミュニケーションが行われ、つらい一面楽しさもあったのではないか。また、皆で作業時間を共有し、会話を交わすことで、多様な人間が多様な価値を提供し合うというコミュニティ内のダイバーシティやインクルージョンの形成、教育が自然に行われたとも考えられる。

しかし、核家族化と職住分離が進み、家庭生活がプライベートの領域に囲い込まれる中で、家事はいつしか主婦一人によって孤独に担われるルーティンワークとなり、ただやりたくないだけの作業、夫婦の争いの種と化した。そして、家電製品の導入によりいかに時間を短縮するか、家事サービスによっていかに外部化するかという消費の対象となることで、人々の生活能力自体が失われていったとも考えられる。その対象は今や家事だけではなく、子育てや高齢

田中元子著『マイパブリックとグランドレベル』（晶文社刊）

者のケアにも拡大している。確かに、主婦という存在だけにその役割を孤独に担わせる限り、いくら家事を担うことの崇高さや家族愛をアピールしたところで、消費化、外部化は止まらないだろう。

### 新しい「家事（イエゴト）」共有と消費

『シーナと一平』『喫茶ランドリー』で行われていることは、そうした家事を家庭内から外に出し、再び共有される時間としてポジショニングし直す試みである。これは家事にとどまらず、子育てや高齢者のケアにもあてはまることであろう。一人で担えばつらいだけのことも、皆で集まってやれば意外と楽しい。その単純な理論をシンプルに場として表現したことが新しい。しかも、それが昔の大家族や村落共同体のように同じ構成員による強制ではなく、出入りもやるやらないも自由な状況でありながら、ネット上のマッチングサービスのように見ず知らずの人に託す不安がなく安心であるとすれば、家電製品や、外部サービスより魅力的に感じるかもしれない。こうした生活者の変化をどう自社の製品やサービスに反映させるのかということも、今後の企業にとって大きな課題となるのではないか。